

日本体育学会  
体育哲学専門領域  
**会報**

Vol.23(3), November, 2019

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 私の研究
- ♪ 学会参加報告
- ♪ 日本体育学会賞受賞報告
- ♪ 浅田学術奨励賞受賞報告
- ♪ 事務局より
- ♪ 次号予告！

巻 頭 言

UNIVAS－NCAA－「現代スポーツへの警告」

入口 豊（びわこ成蹊スポーツ大学）

今年3月1日に、大学スポーツの活性化を目指して、日本版NCAAこと一般社団法人「大学スポーツ協会」：UNIVAS（ユニバス）が、全国197大学・31団体の参加を得て発足したことがスポーツ庁から発表されました。

日本のUNIVASがアメリカのNCAAをモデルに設立されたことから、筆者は自らも訳出に携わって40年以上も前に出版された翻訳書「現代スポーツへの警告」（“The Athletic Revolution”, J.スコット著、片岡暁夫訳、不昧堂出版、1976）を懐かしく読み返すことになりました。

本書は、スポーツ界にまだまだ人種差別が横行していた1968年メキシコ・オリンピック大会直後から1970年代前半当時のアメリカスポーツ界の実態を、社会学者ジャック・スコットが鋭く追及した当時話題の書でした。この書物を、アメリカから文部省在外研究を終えて帰国された片岡暁夫先生（当時東京教育大学助教授）が持ち帰られて、大学院の演習授業のテキストに使用され、受講していた同級の舛本直文氏、滝沢文雄氏、難波邦夫氏と筆者の4人が各4章ずつを分担訳出したことが懐かしく思い出されます。

本書では、1970年代当時のNCAAに関する記述が頻繁に登場します。我が国では、NCAA（National Collegiate Athletic Association）の訳語には、新聞や雑誌でも一般に「全米大学体育協会」が充てられています。Athleticの訳語が「体育」でいいのか？出版に向けて訳語を検討する中で、私達はAthleticの訳語に教育概念である「体育」は不適と判断して「全米大学スポーツ協会」に統一した記憶があります。

近年になって、日本スポーツ協会、国民スポーツ大会等々、体育の名称が次々にスポーツに変更されていく時勢の中で、未だに新聞・マスコミが、NCAAの訳語を修正しないことに対しては違和感を覚えます。

UNIVASの掲げる大目標の一つに、「大学スポーツの収益化」があります。スポーツ庁はUNIVASの将来像について、大学のブランド力向上による収益拡大によって、2025年には収入目標を50億円に掲げています。

一方、100年以上の歴史を持つ本家アメリカのNCAAは、テレビ放映権やスポンサー等からの収益が年間1000億円を超えていると言われています。例えばNCAAの強豪校が集うサウスイースタン・カンファランス（SEC）は、2017～18年会計について、所属する14大学各校

に対して約 47 億円ずつを分配したと発表しています。

この資金力の違いは何か？NCAA が何故これ程膨大な収益をあげられるのか？筆者は、その秘密の一端が、あの「現代スポーツへの警告」の 15 章（筆者翻訳担当章）の中にあった「フォー・イヤー・ルール」（4 年ルール）にあるのではないかと思います。

「4 年ルール」とは、アメリカン・フットボールとバスケットボールに限っては、高校生選手は、卒業後少なくとも 4 年間たたなければプロ契約が認められない、即ち大学に進学して 4 年間プレーすることを義務付けるルールです。例えば、高校バスケット界のスター選手マイケル・ジョーダン、ノースキャロライナ大学のエースとして活躍した後にプロ契約しています。高校のトップスター選手が大学に進学してハイレベルの試合をするから巨大な大学施設で実施される有料試合に観客が殺到し、膨大なテレビ放映権収入を得ることができるのです。

このルールのおかげで、大学コーチは高校のスター選手をプロと競合することなく確保でき、一方、プロ側は野球のようにファームシステムに大金を投じなくとも、4 年間待てば確実にいい選手が確保できるという、持ちつ持たれつの関係が形成されています。現在は、八村塁選手のように傑出した選手は、3 年次終了時にドラフトにかかる飛び級の契約も可能になっていますが、基本的にはこのルールが踏襲されています。

では、我が国の大学スポーツはどうか。もしも人気の高い野球やサッカーの高校スター選手が、確実に大学でプレーしてからプロになるとすればどうでしょうか。UNIVAS が本気で大学スポーツの収益化を目指すのであれば、NCAA のような斬新な発想を持って、競技スポーツ界全体の協力の下で、大学スポーツが自前で有料観客を集め、テレビ放映権料を獲得できる仕組みを考える必要があるのではないかと。40 年前の翻訳書「現代スポーツへの警告」は、現状の UNIVAS の理念先行、懸案事項山積の印象が拭えない筆者に、そんなことを想起させてくれました。

入口 豊 ([iriguchi@bss.ac.jp](mailto:iriguchi@bss.ac.jp))

## 体育哲学考

### 体育哲学の主体性

加藤敏弘（茨城大学）

台風・豪雨の影響によって犠牲になられた皆様のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。また、復興に尽力されている皆様には水分補給を忘れずに健康と安全に留意されご活躍されることをお祈りいたします。

最近、指導実践の中で「脚が自分の身体を運んでいる」と思い込んでいる学生に出会うことが増えてきました。特に女子長距離選手に多いのですが、私は「あなたの脚があなたを運んでいるではありませんよ。〇〇さんが、自ら走っているのです」とアドバイスするようにしています。また、練習中にあるポイントに気づいてもらおうとアドバイスすると、そのことばかりに気をとられ、それまでの練習で積み重ねてきたことを全く忘れてしまう選手も増えてきました。そんなとき「私が指摘したことは、〇〇さんがなりたい選手になるためのアドバイスですよ。あなたはどのような選手になりたいのですか」と問いかけるようにしています。

アスリートを中心としたコーチングでは、アスリートが自ら目標を具体的に設定し、まずはやってみて、失敗して、その活動の過程を振り返り、解決策を考案し、目標を見直し、そしてまたやってみるということの繰り返しを、コーチがサポートするのが基本です。日本では競技種目や年代によっては、まだまだ指導者を中心としたコーチングが続けられています。そうした従来型の指導を受けてきた学生だから、運動している自分という「主体」の存

在になかなか気づくことができないのでしょうか。私は何か別のところに問題があるような気がしています。

学力の3要素として「主体性等」が示され、大学入試でも「主体性評価」が組み込まれることになりました。eポートフォリオやネット出願・判定システムなどが導入されようとしています。そこでは、生徒会活動や部活動に加え、資格試験への挑戦やボランティア活動なども評価の対象に含まれるようになりました。普段の授業でもアクティブ・ラーニングが求められ、先生方は学習者が「主体的に学ぶことができるような仕掛け」をどのように作るのかに奔走させられています。確かにこれまでのように知識や技術を一方的に伝達するのではなく、教員と学習者あるいは学習者同士が双方向的にやりとりをしながら学習が展開された方が「主体的学び」に近づくのかも知れませんが、そうした技法を駆使したり機会を提供したりするだけでよいのでしょうか。

インターネットの普及でありとあらゆる情報を瞬時に収集し、人的ネットワークを構築できる現代社会では、直接的な触れ合いよりもネット社会での存在が重要となっています。子どもたちは、ネットの中で仲間はずれにされることを恐れています。そのことに疲れて嫌気がさした子どもたちは、仮想世界へと没頭していきます。ですから、アスリートが自分の身体を主体的にとらえることができなかつたり、どんな自分を目指して練習に取り組んでいるのかがわからなくなったりしてしまうのは当然なのかも知れません。

21世紀は、市民の側から「私は〇〇したい（になりたい）。そのためには～をする必要がある。なぜならば〇〇は～だから。みなさん、いかがでしょう」と発信をし、それに諸科学が多方面からわかりやすく答えることが求められていると考えています。その前提として市民が身につけるべき基本的な意識、すなわち、自分をどのようにとらえるのか、自分がどうなりたいたのかという意識を醸成する必要があると思います。

そのための「技法」を模索することも大切ですが、本当に大切なことは、自分の身体との向き合い方や自分が社会でどのような姿でありたいのかを問い続けることではないでしょうか。その問いに学習者が自分で答えを見つけだせるような、思考の枠組みを具体例とともにわかりやすく提示することが、今、まさに求められているように感じます。体育原論から体育哲学へ移行した私たちの主体性を発揮する時がやってきました。

加藤敏弘 ([toshihiro.kato.bsk@vc.ibaraki.ac.jp](mailto:toshihiro.kato.bsk@vc.ibaraki.ac.jp))

## 私の研究

## 学びの重ね合わせ

佐良土茂樹（日本体育大学）

異色の経歴だと言われることが多い。本務では世界各国からやってきたコーチデベロッパー（いわゆる「コーチのコーチ」）の養成に関わり、授業では「哲学史」や「西洋比較思想」といった文学部哲学科の授業を担当し、研究ではギリシア哲学（とりわけアリストテレス）と現代の徳倫理学をベースにしてスポーツ哲学やコーチング学に関する題材を論じている。ちなみに、学部時代は法学部だった。何が専門か、と聞かれても最近はこれと言えるものがない。私が主として研究の対象としてきたアリストテレスは周知の通り「万学の祖」と呼ばれ、ありとあらゆる学問に関わっていたのだから、その研究をする自分自身も研究の範囲を狭めて窮屈にやるよりも、今できることを一所懸命にやればいいじゃないかと思ってきた結果、いくつかの研究領域にまたがって活動することになっている。

上智大学で過ごした大学院生およびポストドク研究員の時代には、アリストテレスの哲学、とりわけ倫理学を文献学的に研究していた。そのなかでは「幸福<sup>エウダイモニア</sup>」といったアリストテレス倫理学の中心的な問題を扱うこともあれば、「外的な善」や「誇り高さ」など、あまり

研究されていない主題を扱うこともあった。

そうした研究と並行して、指導教授の先生には内緒にして密かに勉強していたことがあった。自分が実践として関わってきたバスケットボールとそのコーチングについての勉強だ。元々は自分のコーチングの勉強のためにはじめたものだが、いくつもの幸運が重なり、マイク・シャシェフスキーというアメリカのバスケットボールコーチの著作を翻訳することができた。それ以降、コーチング哲学やバスケットボールのスキルや戦術に関する翻訳を行ってきた。

いわば趣味のようにして行っていた勉強が「研究」に変わったのは、日本バスケットボール学会の立ち上げに関わったことが大きなきっかけだったと思う。当時の研究室の一つ下の階に「保健体育研究室」があり、そこに「あの」師岡文男先生がいらした。ご存知の方もいると思うが、師岡先生は、非常にアクティブな方で、スポーツ界のなかでも新しい取り組みに多数関わってきた経験を持つ。その師岡先生に、あるとき、「バスケットボールは学会がないから、研究を専門にやるところがないよね。それなら、作っちゃえばいいじゃん」とお声がけいただき、師岡先生に色々のご助言をいただきつつ、バスケットボールを専門とする先生方と2014年12月に日本バスケットボール学会を立ち上げた。

こうして立ち上がった学会の学術雑誌で、私はそれまでに行っていた翻訳を元に、シャシェフスキーのコーチング哲学に関する論文を刊行した。このコーチング哲学の研究では、シャシェフスキーのコーチングに対する信念や考え方を、アリストテレスの徳倫理学に基づいて、解釈するというものだった。その論文を皮切りに、コーチング哲学に関する論文を4本発表することができた。交わることはないだろうと（少なくとも自分には）思われていた2つの学びが軌を一にした。

スポーツ哲学の分野では、昨年末、「アリストテレス倫理学に依拠したコーチの『幸福』」と題する論文を刊行することができた。この論文を書くきっかけになったのは、現場のコーチの声だった。本務校の「日本体育大学コーチデベロッパーアカデミー（NCDA）」や男子バスケットボール部でコーチ育成に関わったり、日本バスケットボール協会や日本スポーツ協会でコーチデベロッパーやそのトレーナーとして活動したりするなかで、アスリートがスポーツを通じて幸福になるだけでなく、コーチ自身も幸福になれることが重要だと強く感じたのだ。

古代ギリシアの古典研究では、一次文献とその研究論文である二次文献のなかに問題が埋もれていた。その問題を発見し、自分なりの解釈を与えることが研究においてやるべきことだった。しかし、スポーツ哲学やコーチング学では、スポーツの現場に関わる人たちがいて、研究として解くべき問題は、そのなかに存在していることが多い。もちろん、スポーツ哲学にも「スポーツの意義」を問うような理論研究もあるが、私にとっては、研究の問いは「現場」にあるのであり、研究を通じて出した私なりの答えが現場の方々、とりわけコーチの方々にとって少しでも有益なものであって欲しいと願っている。

佐良土茂樹 ([sarodo@nittai.ac.jp](mailto:sarodo@nittai.ac.jp))

**学会参加報告：  
スポーツ哲学研究セミナー2019**

**広瀬 健一**

(東京学芸大学, 日本体育大学研究員, 筑波大学体育系研究員)

「国際スポーツ哲学会第47回大会」と「日本体育・スポーツ哲学会第41回大会」二つの学会大会が9月17日(火)～20日(金)に京都(国立京都国際会館)で開催されました。全発表は81演題あり、私も発表者として本学会に参加しました。

私は「The role of bodily gestures in the teaching of sporting skills.」という演題で、運動の指導場面において身振りが学習者に対する役割を考察した内容を発表しました。指導者の身振り



が学習者の学びにどのように関わっているのかという点に着目し、身振り自体は運動を強調したものであったり、運動の一部を抜き取った運動であったりするものであるという前提を提示しました。その上で、なぜ運動の強調や一部であるはずの指導者の身振りによって、学習者は運動全体を学んでいくのかという問いに対して、アウグスティヌスの照明説を論拠として、指導者の身振りは学習者の見えないところ（＝運動の知らない部分）を照らす役割があり、それによって、指導者の身振りは学習者の運動への気づきを促す可能性があることを主張しました。フロアからは、もし指導者が間違った運動を教えたらどうなるのか？や、学習者の気づきが重要であるならば、指導者は不在でただビデオを見るだけで良いのではないのか？といった質問をしていただき、今後の研究の発展に大変参考となる視点を提供していただきました。

本発表に関しては、発表の直前にチェアーの Albert Piacente 先生にご挨拶に行き、「英語が苦手で緊張しています。」と正直に申し出たおかげで、非常に良心的にその場を取り仕切っていただきました。加えて、金沢大学の小田先生、日本体育大学大学院の KIM さんには、私が困った際に通訳していただきました。お二人方に助けて頂くことがなければ、今回の学会を乗り切ることはできませんでした。この場を借りて感謝を申し上げる次第です。また、拙い発表にもかかわらず、私の発表に来席いただいた先生方にも御礼申し上げます。本学会で感じた恥ずかしさや、もっと研究しなければ...という悔しさも、本学会に参加しなければ感じることはできなかったと思います。

以下は個人的な感想ではありますが、研究発表の内容全体を通して感じたことは、北米系の研究者の発表はスポーツの倫理を問うテーマが多かったということです。私自身が運動指導や身体論に関心がある一方で、スポーツの平等・不平等やジェンダーの問題に関心を持つ研究者の多さに驚きました。教育論や身体論を発表される先生はアジア系に固まっていたように見受けられました（例えば、「Body」をテーマとした 18 日の「Session 4c」、ならびに 19 日の「Session 8c」では全ての発表者がアジア系の研究者で固まっていました。）ところで私は昨年 10 月に「7th Czech Philosophy of Sport Conference」に参加したのですが、その際はフッサールやメルロー＝ポンティの現象学に基づいた身体論を発表される先生も複数いらっしゃいました。地域によってスポーツ哲学という研究領域に対してのアプローチが全く異なることを思い知りました。

最後になりますが、私自身初めての IAPS への参加が自国開催という幸運に恵まれ、長旅の必要なく世界の一流の研究に触れる機会をいただいたことに感謝する次第です。本学会の招致に関わった先生方のご尽力がなければ、このように充実した経験はできなかったと思います。来年の IAPS はクロアチア・スプリットで開催されることが大会の General Meeting で発表されました。旧市街全体が世界遺産に登録されている美しい地での開催となります。日本人の参加者が彼の地で活躍することを願いながら筆を擱きたいと思います。

広瀬健一 ([hirose09@u-gakugei.ac.jp](mailto:hirose09@u-gakugei.ac.jp))

**学会参加報告：**  
**2019 台湾運動哲学国際学術研討会**

**2019 台湾運動哲学国際学術研討会に参加して**

**高田 哲史（関西福祉大学）**

2019 年 11 月 1 日（金）から 3 日（日）に、国立台湾大学で 2019 台湾運動哲学国際学術研討会が開催された。日本からは、近藤良享先生、畑 孝幸先生、深澤浩洋先生、石垣健二先生、高橋浩二先生、坂本拓弥先生、照屋太郎さんと私の 8 人が参加した。

10 月 31 日（木）の昼過ぎに台北のホテル入りをした私は、すぐ学会が開催される国立台湾大学のスポーツセンターを下見し、その後大学構内を散策した。日本統治時代に台北帝国大学として設立されたこの大学は、今や 3 万人を超える学生が通うマンモス校で、ノーベル

賞をはじめ、各賞受賞者を数多く輩出している台湾随一の総合大学である。そのような大学で明日から学会が始まる...私の胸は高鳴った。

初日 1 日（金）は、中国語での発表が行われた。午後からの国立台湾体育運動大学の許立宏先生の発表「Olympic Education and Values of Sport」は、オリンピック教育をスポーツの価値という視点から論じられた。英語のパワーポイントでまとめてくれたので、とても解り易かった。

2 日（土）は、8:30 から Reception, 9:00 から Opening Ceremony があつた。日本からの参加者 8 名も勢ぞろいし、大会に臨んだ。午前中は、St. Francis Xavier University（カナダ）の Deborah P.Vossen 先生の Keynote Speech I「Toward a Utopia of Really Magnificent Games :An Appreciative Lusory Inquiry」があつた。Magnificent Games とは、具体的なスポーツ種目のことではなく、自分の頭脳の中で、壮大に展開する世界のことを意味していると私は解釈したが、近年話題になっている e-スポーツにもみられるように、今一度私たちにとってスポーツとは何かを考える良い機会を与えてもらった。

午後からは、3 会場に別れて口頭発表があり、照屋太郎さん、深澤浩洋先生、坂本拓弥先生、高橋浩二先生が第 1 会場（247 教室）で発表を行った。4 人とも堂々とした英語で発表され、フロアとの交流も活発に行われてとても良かった。その後、Linfield College（アメリカ合衆国）の Jesús Ilundáin-Agurruza 先生の Keynote Speech II「Embracing the Game: A Comparative Examination of Values and Ethics in Sports」と、近藤良享先生の Keynote Speech III「A Right and Good Action in Competitive Sports: The Logic and ethic in a game」の発表があつた。Jesús Ilundáin-Agurruza 先生は、パワーポイントの写真と映像を使って、フロアとの対話を重視した大変魅力的な発表をされた。そのあと、私は体調を崩し退席したが、後日近藤先生からメールをいただき、大会の模様を把握できた。（近藤先生、ありがとうございました）

最終日の 3 日（日）は、午前中は台湾学会の口頭発表があり、午後からは、釜山国立大学（韓国）の権五輪先生の Keynote Speech IV「対韓国体育哲学的現況和未来的思考」の発表があつた。発表は 25 分ほどで終わったが、その後 30 分を越える質疑応答が活発に行われ、和気藹々とした雰囲気でもとても楽しく、良い雰囲気で終わった大会であつた。

最後に私見を少し。一番感じたのは大会冊子のすばらしさである。A4 版 278 ページ（厚さ 1.5cm）にも及ぶもので、中国語、英語で大会に必要なことがすべて網羅されていた。台湾学会のレベルの高さを垣間見た。また、日本の発表者の意欲的な取り組みにも感動した。さらに、台湾は食べ物がおいしい。そして、4 日間徒歩で過ごした私は、大安森林公園（Daan Park）の運動ユートピアに癒された。可能ならば又訪問したい。台湾学会の皆様、日本から参加された皆様、ありがとうございました。

高田哲史（[takata@kusw.ac.jp](mailto:takata@kusw.ac.jp), [takata2010phd@yahoo.co.jp](mailto:takata2010phd@yahoo.co.jp)）



大学を定年退職し 3 年半の「古い木に花」、びっくりした出来事であった。受賞したのは定年後に作成した論文である。ここでは受賞報告として私の研究、その「空間の履歴（桑子敏雄）」の話をしたい。何故なら、定年後も研究を継続している私は、その「空間の履歴」によって再編されたからである。

まず「研究始まりの遅れ」の話である。学生時代は「体育心理学」のゼミ、卒業論文は卒論発表会のあとに書き直し。教員になる気は全くなく、大学院を受験したが不合格。その後、取りあえず中・高校の非常勤、専任教員、そして生徒の生活指導がいやで大学教員へ。大学ではバスケットボール部のコーチングが中心、授業では「体育原理」を担当することになる。「体育原理」って何だ、よく解らないので「体育原理専門分科会」の箱根の夏期合宿研究会に参加してみる。この時 28 歳、初めての体育哲学（原理）研究者と「遭遇」した。自己紹介で「私は心理から原理へ、一文字違いの世界に入りましたのでよろしくお願いいたします。私を覚えて頂くために、一曲歌います♪♪♪」。これが私の「研究の遅れた始まり」の出来事である。

私の初めての研究論文は「運動部集団の原理的考察」、30 歳の時である。この運動部集団の研究は 10 年間で 4 本（Ⅰ～Ⅳ）大学の紀要へ投稿するが、40 歳になっても私はコーチングが中心の「空間」に存在し、研究は付随した活動。その後、コーチングはバーンアウト（燃え尽き症候群）する。ちゃんとした研究を知りたくて「筑波」へ。これが 41 歳の内地留学、「遅れた研究活動の出直し」という出来事である。筑波大学研究室の歓迎会、そこで片岡先生から「学位（博士）を取っていったら」と言われた。びっくりして「そんな大層も無い・・・」と辞退したが、翌日「お願いいたします」、研究活動の出直しが始まった。そこには、プラトンやアリストテレスが普通に存在していた。私はコーチング「空間」から研究の「空間」に存在するようになった。

それから 5 年、46 歳の時に学位（博士）を取得、その学位授与式において、その後の研究に影響する出来事があった。その時の筑波大学学長は「江崎玲於奈」先生、会えるのを楽しみとしたが出張で授与式不在。代わりの副学長が「学位はとっても大変」と述べた。これは「とても（非常に）」と「取っても」の洒落、つまり「学位取ってもその後の研究活動が大変」だということだった。以前の日本の「博士」は「○○学博士」と言われ、その「○○学」を成し遂げた人物に与えられた。それが括弧付き学位、つまり「博士（体育学）」となり、「研究始めてもいいよ」という欧米と同じような学位となった。つまり副学長の洒落は、「博士を取った後、それなりにちゃんとした研究継続が必要だよ」というメッセージであった。私は納得した。

私の博士論文は「運動部活動における指導概念の研究」、コーチング論の研究であったが、次は「体育」をテーマとして研究継続したいと思った。そして『「体育における人間形成」論の批判的検討』の投稿（体育原理研究）を始める、49 歳であった。この批判的検討は 1～8、14 年間継続し、私の研究原点である箱根で発表をした。箱根合宿研究会の日中と夜、様々な語らいと出会い、その「空間の履歴」に影響を受けた。この「批判的検討 5」の研究で今回の受賞論文のテーマとなる矢野智司の「生成」に出会う。その後、「生成」は「スポーツ運動」を対象として「体育学研究」に 3 編投稿した。そこで辛辣であるが納得する査読と「遭遇」。そこにも研究の「空間の履歴」があり、私の研究の「空間」が再編された。そして定年を迎えることになる。

定年後に何をするかを考えている頃（定年半年前）に「くも膜下出血」にて死にかけた。私って何だろう、哲学的な考えをした。そうだ、私は研究の「空間の履歴」によって再編され

たのだ。始まりの遅れた研究を全うする人生を送ろうと考えた。定年後、「スポーツ&レジャー研究所」という架空の組織を立ち上げ、その研究所のHP（「すぽれじゃ」で検索）を毎月作成すること、そして研究論文を書くことが私の楽しみとなっている。夕方風呂に入り、手造りのサンルームで庭木を愛で、ビールでのどを潤しながら「考える葦」となり、メモを取る。翌日、朝から机に向かいメモった事項を再考する。それが研究、HPのアイデアとなる。午後からはテニス、サイクリング、ウォーキング、そして「農業」、スポーツ&レジャーの活動である。そしてまた「風呂」-「ビール」-「メモ」へ。人間の行為は自己の履歴を形成すると同時に、その行為の対象の空間にも履歴を残すという（桑子）。よってこの私の行為が体育哲学研究の「空間の履歴」となることを願っている。

久保正秋 ([kubo@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp](mailto:kubo@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp))

### 浅田学術奨励賞受賞報告

## プロフェッショナル競技者の倫理性

高岡英氣（敬愛大学）

この度、論文「プロフェッショナル競技者の概念的考察：経済・技術・倫理の三見地から」（『体育学研究』第63巻、第2号、517-538頁）で、浅田学術奨励賞を受賞しました。同賞を創設された故・浅田隆夫先生は、筆者の筑波大大学院時代の指導教官である佐藤臣彦先生の恩師にあたり、その意味で筆者は浅田先生の孫弟子となります。

今回の受賞にあたって頭をよぎるのは、2008年に早稲田大学で開催された日本体育学会第59回大会の思い出です。会期中に催された筑波大学体育哲学研究室（現・体育・スポーツ哲学研究室）のOB・OG会に浅田先生がご出席されていて、この時にお会いしたのが最初で最後の機会でした。ちょうどその翌日に、佐藤先生と大学周辺の蕎麦屋で昼食をご一緒する機会があり、その席で浅田先生が学術奨励賞の創設を提案された、というお話を伺ったのです。その賞を今回いただくことになり感慨一入です。

さて、今回の受賞論文はプロフェッショナル競技者の概念内容を明らかにするため、その「職業」という側面に焦点を絞り考察を行ったものです。そこでは、職業社会学者の尾高邦雄の議論をベースに、経済・技術・倫理の三見地からプロフェッショナル競技者の職業特性を分析していきました。その内容については論文本体をご一読いただければと思います。

本論文の中で特に今日的に意義があるのは倫理的見地に関する考察でしょう。尾高は、職業には単なる経済的利益の獲得手段に止まらない、人々が社会的分担を果し社会に貢献するための道、という側面があることを強調しました。こうした観点から筆者は、プロフェッショナル競技者という職業にも特有の社会的役割があり、特に高度の専門性を有した競技者においては、ゲーム内における勝利の追求に加えて、観戦者を魅了することや、その時代において広く人々に共有される社会的価値を体現することといった、重要な役割があると主張しました。

昨今、日本大学アメリカンフットボール部の危険タックルとそれに関わる指導者の不適切な指導の問題、日本ボクシング連盟の元会長の関与が取り沙汰された審判不正や助成金の不正流用の疑惑、その他、様々な競技における指導者のパワーハラスメントの問題など、数多くの不祥事がアマチュアスポーツを舞台に起っています。かつて、スポーツ界において支配的であったアマチュアリズムは、アマチュアこそが倫理的に正しいスポーツへの関わり方であるとする思想でしたが、むしろ現代ではアマチュアスポーツにおいて非倫理的な出来事が頻出していると言えるでしょう。

アマチュアリズムは、経済的利益をスポーツに持ち込む非倫理的な存在としてプロフェッショナル競技者を蔑みました。この思想には、職業の倫理的側面に対する理解が欠如してい



たと言えます。尾高が言うように、職業には単なる経済的利益の獲得手段に止まらない、社会的な役割の実現という側面があります。プロフェッショナル競技者もまた、スポーツを通じて社会的分担・貢献を果たすことを求められる、社会に対して開かれた存在です。人々の注目を集める彼らには、社会のロールモデルとなるような倫理性が問われることになるのです。

上記のような不祥事を見るにつけ、特に現代のアマチュアスポーツには、一般社会から隔絶された村社会のルールのようなものがまかり通り、結果として非倫理的な出来事が再生産されているように思えます。こうしたことが繰り返されることによってスポーツに対する社会的信頼が棄損される前に、われわれはプロフェッショナル競技者の倫理性を手引きとするべきかも知れません。

高岡英氣 ([h-takaoka@u-keiai.ac.jp](mailto:h-takaoka@u-keiai.ac.jp))

**事務局より**

問い合わせ先：高岡英氣 ([bureau@pdpe.jp](mailto:bureau@pdpe.jp))

9月10日から12日にかけて開催された日本体育学会第70回大会につきまして、本領域のプログラムは全て無事に終了いたしました。関係者の皆様にお礼申し上げます。会期中に開催された総会の議事録は次号の年報に掲載いたします。今年度の学会賞には元会長の久保正秋先生が、浅田学術奨励賞には高岡英氣が選ばれました。なお、来年度の学会大会は開かれず、横浜でスポーツ学術国際会議が開催されます。貴重な機会ですので、会員の皆様からも積極的な参加をお願いいたします。

**定例研究会のお知らせ**

森田 啓（千葉工業大学）

**2019年度 体育哲学専門領域 第2回定例研究会**

日時：12月7日（土）15：00～18：00（予定）

場所：日本体育大学 世田谷キャンパス 3204 教室

**【次第】**

15：00 開会：代表挨拶・諸連絡

**【第1部 一般発表①】**

15：05 発表① 照屋太郎

演題「体育の本来の目的と方法 ―現象学と古来の伝書から―」

**【第2部 シンポジウム「体育・スポーツにおける現場の力」】**

15：45

司 会：高橋浩二（長崎大学）

発表者：長内昭継（鹿角市立八幡平小学校）

波多江美奈子（千葉県教育庁教育振興部体育課）

植木陽治（常翔啓光学園高等学校）

17:00 休憩

【第3部 一般発表②】

17:10 発表② 小井土正亮（筑波大学）

演題「チームスポーツの指導者がもつ暗黙知を形式知へ」

17:40 閉会：諸連絡・副代表挨拶

【第1部 一般発表①】

照屋太郎 「体育の本来の目的と方法 ―現象学と古来の伝書から―」

概要：

本研究の目的は、体育の本来の目的と方法を明らかにする事である。

本研究の方法はフッサー現象学に基づく。古来の剣の伝書、侍の在り方の伝書、及びキリスト教の新約聖書を、体育が本来目指すべき、人の見本として参考にする。

本研究は、筆者自身のプロボクサーだった経験から、体育という現象が図らずも発生してしまった時それがどんな現象だったか、を考える。その体育の原理から、体育教師は本来、何を目的に、どうすべきか、を考える。

【第2部 シンポジウム「体育・スポーツにおける現場の力」】

司 会 高橋浩二（長崎大学）

発表者 長内昭継（鹿角市立八幡平小学校）

波多江美奈子（千葉県教育庁教育振興部体育課）

植木陽治（常翔啓光学園高等学校）

シンポジウム趣旨：

本シンポジウムでは、教育や指導現場で生起している諸問題や体育・スポーツ独自の可能性について、「学校や指導現場において発生する諸問題がどのような力（関係）によって生起しているのか」というテーマから検討し、「現場からの力」の重要性を議論したい。本シンポジウムによって、今後の学校体育やスポーツの可能性が開かれている方向性についても検討することが可能だろう。一定の方向性を見出せるような議論を期待したい。

【第3部 一般発表②】

小井土正亮（筑波大学）「チームスポーツの指導者がもつ暗黙知を形式知へ」

概要：

スポーツの指導現場では、指導者は時々刻々と変わる状況において適切な対応をとることが求められる。勝利という目的を達成するためにとる一連の振る舞いは、指導者個々に属する「経験」や「カン」としてまとめられ、「パンドラの箱」に入ったまま他者が知り得ることができない。本発表では、いかに指導者がもつ指導に関する暗黙知を形式知として表出させるか、その方法や考えかたについて、拙稿の紹介ならびに話題を提供する。

『体育哲学年報』事務局より

学会・定例研究会発表者への投稿のご案内

林 洋輔（大阪教育大学）

現在、『体育哲学年報』50号（2020年3月発行予定）の原稿を募集しております。学会

大会や定例研究会でご発表された方は、編集事務局のアドレス（林 洋輔宛て：[qqfs3s79@bridge.ocn.ne.jp](mailto:qqfs3s79@bridge.ocn.ne.jp) または [hyosuke@cc.osaka-kyoiku.ac.jp](mailto:hyosuke@cc.osaka-kyoiku.ac.jp)）にご投稿ください。締め切りは 2020 年 1 月末日です。また、原稿作成の際には体育哲学専門領域 HP の投稿規程、投稿の手引き <http://www.pdpe.jp/toukou.html> をどうぞご参照ください。

### 次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は、広報担当：田井（[tai@gunma-u.ac.jp](mailto:tai@gunma-u.ac.jp)）までお問い合わせ下さい。

.....

### 体育哲学専門領域会報第 23 巻第 3 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域  
関根正美（代表）  
編集者 田井健太郎、佐々木 究、阿部悟郎（広報担当）  
発行日 令和元年 11 月 15 日  
連絡先 〒263-8588  
千葉県千葉市稲毛区穴川 1-5-21  
敬愛大学経済学部 高岡英氣 気付  
電話：043-251-6363（代表）

### 【編集後記】

ラグビー・ワールドカップ日本代表チームの躍進には「にわか」ながら心躍らされました。選手や関係者の皆さん、お疲れさまでした。スポーツの力、たしかに感じました。

来年はいよいよ東京でオリンピックです。マラソンや競歩はいつ、どこで実施されることになるでしょうか（執筆現在で未定です）。暑さを避けるため、早朝（未明）スタートという案、札幌で開催という案、はたまた被災地で開催という案もあるようです。東京オリンピックなのに札幌で良いのか、自国開催なのに時差ボケに悩まされるのか、だとしたら何のための自国開催かなど競技の外側で議論が喧しいです。始まってしまえばラグビーのように盛り上がっていくのでしょうけれども、大会運営というのはことほど悩ましいものです。

我らが「いだてん」たちの活躍が世情を賑わす日々、待ち遠しいですね。（S）